

宮崎、鹿児島および九州島嶼地域の天理教

南九州の宮崎県、鹿児島県と九州の島々における天理教伝道を述べる。島々とは奄美諸島、五島列島、対馬である。

教会本部から遠隔の地は概して伝道経路が単純で教会系統は多くない。そこにある教会を大教会ごとに分けると主な大教会は限定され、その大教会系統の教会が占める割合が大きい⁽¹⁾。教会本部から遠隔地にある宮崎、鹿児島両県もこの例に漏れず、宮崎は南阿、高知、此花の大教会、鹿児島は南海、芦津の兩大教会が目立つ。

宮崎、鹿児島両県に入ったこれらの教会による伝道の発信地は四国と近畿の和歌山、大阪、三重（和歌山県境旧紀伊国）である。南九州から見て全て北東からやってきた。伝道における「方向」を考える上で注目すべきであろう。

宮崎県から述べる。南阿、高知、此花の大教会はそれぞれ宮崎県に20カ所程の教会を有す。明治期、徳島県では北海道や宮崎への移住を希望する人が多く、明治21、2年頃、撫養系信者たちも新天地を求め宮崎県児湯郡へ移り住んだ。そこへ明治26年に市橋新太郎が布教師として入る。市橋は1年で撫養に戻るが、後を小山又四郎、岩佐惣太郎が受け継ぎ明治28年、南阿部属日宮分教会を設立した。宮崎県内に南阿系教会は19カ所あるが、その内14カ所が日宮の関係教会である。

高知の都築竹治は明治25年宮崎布教について「おさしづ」を伺い「遠い所でも心配はいらない」とのお言葉を頂き、勇んで船便にて宮崎の町へ赴いた。かつての知人福森楠太郎を訪ねると、福森は身上に苦しんでいた。神様のお計らいだと早速おさづけを取り次ぎ即座のご守護を頂いた。感激した福森は都築の協力者となり自らも信仰者、布教師の道を歩むことになる。

都築のおたすけは評判をよび、一人では手が回らないので高知へ応援を依頼した。やがて宮崎の町や周辺の村々に、また延岡方面にまで広がる。都築は数カ月で高知へ引き揚げるが後任の人たちに受け継がれ、明治28年に宮崎分教会（当時出張所）が設立された。

現在、宮崎県内にある高知系教会は19カ所で、内16カ所が宮崎分教会の関係である。ほぼ全県にわたっているが延岡、日向(市)、日南に多い。

此花系の教会は21カ所あり、宮崎県では最も多い。中心になるのは高鍋分教会だが、ここは明治37年、和歌山県湯浅分教会の竹中とめと梅本姉弟の宮崎布教から始まった。

明治36、7年頃、此花系湯浅の田辺藤之助は遠隔地布教の必要性を痛感し自ら出かけようとした。当時湯浅の教会にとって田辺はなくてはならぬ存在だったので、竹中とめは自分たちが布教に出ようと考え、明治37年、宮崎へ旅立った。

宮崎は教会の少ない所で、天理教を知らない人が多い。したがって土地の人みんなが反対してくれ、教祖のひながたの一端でも通らせて頂けると思ったのが宮崎を選んだ理由だという。ちなみに当時宮崎県の教会は2カ所のみで沖縄を除くと全国で最も少ない方だった（『みちのとも』明治39年11月号）。

竹中たちは大阪から船便にて宮崎県細島港に着き宮崎市へ向かったが、手前の高鍋町で布教することに変更。明治43年高鍋分教会（当時宣教所）を設立した。なお、此花系の宮崎県内21カ所の教会は全てが高鍋分教会の関係である。分布地域は高鍋および日向市、都城市に多い。

さて最初にも述べたが宮崎への伝道はいずれも発信地から南西へ向け伝えられたものである。宮崎からの目線で言えば、天理教は海から入ってきたのであり、九州他県から陸続きにきたものは少なかった。

鹿児島県の話に移る。教会系統では南海大教会、芦津大教会が多い。南海は県内に34カ所、芦津は33カ所の教会を有している。3番目は筑紫大教会の13カ所であるから南海、芦津の割合が大

きい。2教会の分布地域は明確に分かれ、九州本島に南海、奄美大島に芦津の教会が多い。

明治28年、南海部属紀熊分教会（当時支教会）の岩室辰之助は家族にも告げず単身鹿児島布教に出た。紀熊の教会や岩室家では心配したが辰之助の勇気ある行いに兄虎太郎が南海山田会長の後押しを受け、鹿児島布教に旅立った。鹿児島に着くと、兄は鹿児島市内に、弟は大隅半島鹿屋を布教地と定めた。

鹿児島の言葉は他国者には分かりにくく困難が多かったというが、おたすけの成果が上がり「〇〇の生き神様」と尊敬を集め、明治29年鹿児島分教会（当時布教所）を設置した。現在鹿児島県内に教会12カ所がある。

南海系統はもう一つの伝道が鹿児島に入っている。紀尾分教会（当時支教会）の山田敬誠と山田亀治郎は明治28年鉄路、鹿児島に向け出発した。鹿児島市に着いた二人は岩室虎太郎に状況を聞いた上、国分方面へ布教に出た。岩室と同様、鹿児島弁に苦労しながらも次第におたすけが上がり、土地の有力者の入信もあって明治29年、國府分教会（当時出張所）を設置した。

芦津大教会も鹿児島県に33カ所の教会がある。しかし南海系統が主に九州本島であるのに対し、芦津系統は奄美大島に23カ所の教会があり、県内その他の地域に10カ所がある。

大阪の芦津系布教師、寺田松太郎が奄美大島に布教したのは明治23年だった。寺田のおたすけは御神水を病人の患部にかけて守護を願うもので、信者たちは「寺田様の御水」と呼んだ。明治27年奄美大島名瀬に大島分教会（当時出張所）が設立された。4代会長加世田隆は小学校長や名瀬市長、鹿児島県議も務めた人であったため奄美大島における天理教のイメージは良好だったという。奄美大島にある芦津系教会は全てが大島分教会の関係である。

奄美大島（名瀬）は鹿児島市から380kmも離れた島であるが面積712平方キロメートルと日本では大きな島であり、他の鹿児島県地域に比べ、人口比では5倍以上もの教会数がある。注目すべきことである。

奄美大島と同様、九州には教会の多い島がある。その中、中通島（五島列島）と対馬の天理教を取り上げたい。

中通島には防府大教会－佐波分教会系統の中通分教会があり、29カ所の教会を有している。うち中通島を含む五島列島に17カ所がある。人口面積ともさほど大きくない島々にこれだけの教会が設立されている事実は注目に値する。山口県から長崎へ布教したのは藤田ふくで明治31年のことだった。そこから五島の中通島に道が付き、現在の発展へとつながった。

九州本島から遠く離れた対馬にも7カ所の教会があり、全てが高知大教会－厳原分教会の関係である。高知から布教のため対馬に赴いたのは宮崎布教でも述べた都築竹治であった。都築竹治という人は根っからのあらきとうりょう、開拓者であろう。高知大教会伝道史中、遠隔地布教に都築竹治の名前が何度も出現する。

都築は宮崎布教の後、一時島根県浜田に布教していたが明治26年に対馬へ布教に出た。九州本島より朝鮮半島に近く風俗、習慣、言葉が高知とは全く違い、さすがの都築も相手にされないで途方にくれた。しかしその年の対馬は梅雨になっても雨が降らず困っていた。都築は村人を集め、私の言うとおりにしたら雨は降ると決死のお願いをし、みごと雨の守護を頂いた。これで都築におたすけを願う人が殺到し、明治28年厳原分教会（当時布教所）が設置された。

奄美大島、中通島、対馬と同様に伝道史の上から看過できない島々が日本各地に存在する。機会を見て取り上げたい。

(1) 北海道は特別で、遠隔地でありながら多数の教会系統が伝道線を伸ばしている。